

小貝川激特事業着手 30 年
昭和61年小貝川水害・激特事業と
これからの水防災を考える



平成 30 年 1 月 30 日



国土交通省下館河川事務所

平成 30 年 1 月。

昭和 61 年 8 月の小貝川洪水を契機として行われた小貝川激甚災害対策特別緊急事業—通称、「激特事業」の起工式から 30 年を迎えました。

国土交通省下館河川事務所では、これを機に、昭和 61 年洪水や激特事業の様子を掘り起こし、皆様にお伝えしていくとともに、水防災意識社会の再構築を図ることを目的として、約 1 年をかけ、小貝川の洪水や激特事業を経験された方々にお話を伺うなど、様々な取り組みを行ってきました。

中でも、平成 30 年 1 月 30 日の節目となる日に実施したシンポジウムでは、次代を担うこどもたちと、当時の経験者であるおとなたちとの記憶の継承も実現し、水防災への意識を高める機会とすることができました。

本冊子は、その内容をより多くの方々に知っていただくためにとりまとめたものです。

平成 30 年 1 月 30 日 下館河川事務所

目 次

小貝川着手 30 年事業これまでの取り組み	1
昭和 61 年洪水の記録（写真集）	2
小貝川激特事業の記録（写真集）	3
母子島地区のにぎわい	5
水防災意識社会の再構築に向けた取り組み	6
特別インタビュー	
インタビュー 1（濱野正氏，福田昌史氏）	8
インタビュー 2（鈴木健一氏，齊藤幸男氏，宮川昌己氏）	12
インタビュー 3（上野怜氏，河添良美氏，仁平芳之氏，渡邊節子氏）	16

*氏名は 50 音順に記載

昭和 61 年小貝川水害・激特事業とこれからの水防災を考える

シンポジウム概要	21
開会挨拶（筑西市長 須藤茂）	22
事業概要	23
【第 1 部】 こどもとおとなのトークセッション	24
【第 2 部】 お天気キャスターとつくろうマイ・タイムライン ～自分の逃げ方を考えよう～	37
感謝状贈呈	42
閉会挨拶（下館河川事務所長 里村真吾）	43
シンポジウム写真	44
アンケート結果	47

激特着手30年事業これまでの取り組み

激特事業着手30年事業として、年間を通じてのパネル展示を行ったほか、水防災への意識向上にむけて出前講座を9回実施しました。また、フェイスブックを通じて事業の紹介を行ってきました。

平成29年3月～9月 ▶ 筑西市役所での常設パネル展示



平成29年4月～12月

- ▶ 市内イベントでのパネル展示
- ▶ 小中学校への出前講座
- ▶ 洪水・激特経験者の方々へのインタビュー



平成29年5月 ▶ 筑西市水防訓練



◻ 水防災意識強化週間 ◻

- ▶ パネル展示（筑西市役所会場）
- ▶ マイ・タイムラインをつくろう！講座

平成29年9月



- ▶ 特設ホームページ開設
- ▶ 川と共生する地域づくり in 筑西
- ▶ ダイヤモンド筑波のおもてなし

平成29年10月



平成30年1月 ▶ 小貝川激特事業着手30年シンポジウム

昭和61年洪水の記録

昭和 61 年 8 月 小貝川洪水の発生状況



筑西市内の様子



旧下館市飯田地先



旧下館市母子島地先



旧明野町大林地先



旧下館市大和町



旧下館市

小貝川激特事業の記録

昭和 63 年 1 月 30 日 小貝川激特事業起工式



母子島遊水地の造成

初期湛水池工事



囲ぎよう堤と越流堤工事



囲ぎよう堤工事

越流堤工事



旭ヶ丘移転地の整備



街づくり勉強会



集団移転地竣工式



激特事業竣工式



母子島地区のにぎわい

小貝川洪水で被災された母子島の皆さまと一緒に、様々な取り組みを行ってきました。

野焼き



ダイヤモンド筑波での“おもてなし”



水防訓練の実施



嘉田生崎小学校での 出前講座の実施



クリーン大作戦の実施



土のう積み訓練



母子島の桜



街の魅力の発信



水防災意識社会の再構築に向けた取り組み

社会全体で、水害から大切な街・人を守るために。できることから始めています。

共同点検



ホットライン訓練



水防訓練



土のう積み訓練



市長と所長の意見交換



出前講座の実施



そして未来へ。。。

特別インタビュー

昭和61年8月の水害と向き合い、乗り越えた方々に、当時の様子をお聞きました。

●インタビュー1 濱野正氏 × 福田昌史氏

●インタビュー2 鈴木健一氏 × 齊藤幸男氏 × 宮川昌己氏

●インタビュー3 上野怜氏 × 河添良美氏 × 仁平芳之氏 × 渡邊節子氏

*氏名は50音順に記載

インタビュー 1

洪水の発生からその後の復興の時期にかけて下館市長を務められた濱野正氏と、建設省下館工事事務所（現在の国土交通省下館河川事務所）で事務所長として激特事業の指揮を執った福田昌史氏のお二方にお話を伺いました。

福田元下館工事事務所長

建設省下館工事事務所長（現在の国土交通省下館河川事務所）として激特事業を指揮



濱野元下館市長

洪水の発生からその後の復興期にかけての下館市長



インタビュー（敬称略）

濱野正（元下館市長）

福田昌史（元下館工事事務所長）

—— 【聞き手】 里村真吾（下館河川事務所長）

【昭和 61 年洪水と市長としての思いなど】

——最初に、昭和 61 年の洪水の時に下館市長を務めていらっしゃった濱野さんから、当時の状況など、記憶に残っている印象的なことをお話いただけますか。

濱野 昭和 61 年以前から、母子島のあたりは毎年、夏になると大水が出ていたんです。私も、市庁舎に詰めたり、現場に行ったりしていました。そんな状況だったので、住民も備えがあったんだと思います。昭和 61 年の時も、浸水家屋は多かったけれど、死者が出なかったのが幸いでした。住民の救助活動では、自衛隊にも

救助要請をしましたが、最初から地元の消防団が救出活動に頑張ったのと、過去の水害で危ないところは知っていて、うまく避難や救助とかの誘導ができていたと思います。

——普段から水防災に対する意識があって、それが死者ゼロに繋がったということですね。

濱野 とにかく毎年大水が起きるのは困ったと。何とかしなきゃならないって、そういう考えでいたところに、この大洪水になった。それで、これをどうするかということを、河川事務所の方へもいろいろとお願いに行きました。

私が市長になった当時の茨城県知事である竹内知事は、建設省の都市局長からなった人でした。私は、これからは都市計画事業を中心に進めなければ町は発展しな



S61.8 台風 10 号による被害
（母子島付近）

いと思っていたこともあって、竹内知事を通じて建設省との関係が深まっていたところに、この水害と激特事業でした。建設省も本気で取り組んでくれたと感謝しています。

———水害の前からそういう人脈を作っておられたこともあって、単なる河川事業ではなく、新たな街づくりを伴う集団移転のような事業にもつながっていったのかな、と聞いておりました。



左から福田氏、濱野氏、里村事務所長

【激特事業の立ち上げと用地交渉】

——— そういう中で激特事業として母子島遊水地を造りあげていくことになりますが、この事業に取り組むにあたって、思いを込められたことや苦勞されたことなどをお聞きます。

福田 激特事業の一つ目の課題は、母子島の移転を含めた遊水地事業の位置づけでした。当時はいろいろ考えていたようですが、私が下館に来て考えたのは、この事業は河川法に則った事業として進めるのが、方法としても時間的にも最も適当ではないかということで、まずはそれまであった計画の改定を早急に、というのが僕の思いでした。

母子島に遊水地を造るには、調査の結果、5つの集落、109戸の方々の移転が必要であることが分かりました。まずはこの方たちの同意が必要なわけです。時間が限られている中なので、一人ひとりと交渉している時間がなかった。そこで、移転をお願いする方々にも組織を作ってもらい、組織と組織で対話をするという方法で進めることになりました。この時は、交渉委員会ということで、二つの組織を作ってもらいま

した。一つはご自身が移転される方々のための推進委員会。もう一つは、ご自身は別の場所に住んでいて自分は移転しないけれど、移転地に土地を持っておられる方。事業を進めるには、この方々の理解が必要不可欠なので、こちらは地権者対策委員会という組織を作ってもらい、用地交渉を進めました。

また、移転先の場所を決めるのも大変なことでした。最終的に決まったのが、小釜（おかま）という地区ですが、そこは、移転する5つの集落の方々と、地権者対策委員会の方々が持っている土地がたまたま半々くらいでした。そういう中で最終的に折り合いをつけて場所を決めたという経緯がありました。

その次は価格です。遊水地になる場所は「河川区域」という位置づけになり、人が住んではいけない場所になります。当然、土地の価格は低下しますので、その対価を国が払うということですが、これもまた大変でした。ここにおられる濱野市長にも、何度も相談させて頂いて、最大限考えて頂きました。



調印式

濱野 用地交渉は夏の暑い時期でしたが、所長と一緒に何十回か各集落へ行きました。まず、集団移転をすることの了解を受けてから農地に対する補償の交渉をしましたが、これもなかなか決まらなくて大変でした。最終的には1反いくらと了解を得て決まりました。

福田 109戸の方々に移転をしてもらうのに5年とい



ほぼ移転が完了した旭ヶ丘
(当時)

うのは、かなり短い時間だったと思います。ベースとして、水害から縁を切りたいという思いが地域の方の心にあったのではないかと思います。

【新しい取り組みと技術開発】

———激特事業を進めていくなかで、福田さんが新しく取り組んだことなどを、お聞かせいただけますか？

福田 災害は起きてしまいましたが、その下館から、明るい話題を発信したいという気



フラワーカナル

持ちが強くありました。その取り組みの一つがフラワーベルトです。最初は、藤代で500mくらいで始めましたが、地域の人から「川に花があったほうがいい」、「川づくりをやりたい」という声が上がってきました。それで、好きなように使ってくださいと、コスモスの種を一升枥で渡しました。町の人が一生涯懸命になって、みるみる延長が伸びて行きました。あとは技術開発です。大きな事業ですから、新しい技術を導入しました。一つは、川神馬のポンプ場のゲートに排水ポンプを連動させたもので、2つの施設をまとめることで、コストダウンを図りました。また、「かごマット」というものを取りいれました。従来、川の護岸はコンクリートブロックを使っていましたが、かごマットを取り入れることで、地形の変形で壊れにくく、また植物も生えるので、より自然に近い風景を維持できます。

これは鬼怒川で第1号をやったので「キヌマット」とも



越流堤「キヌマット」施工

呼ばれています。地形の変形に強い工夫としても一つ、「動く樋管」を採用しました。「樋管」というのは、内水を川に流すために、堤防の中に管を通したのですが、従来は動いたらいけないということで固定していました。これを、地盤と同じように柔軟に動くようなものにして、壊れにくくするような工夫をここで始めました。

【川への思い】

———濱野さんが市長でおられた時に、川、特に小貝川に対して、どのようなイメージを持っていたらっしゃいましたか。

濱野 小貝川は、下館からは少し東側に離れているので、私たちが遊んだのは街中を流れる勤行川なんですね。若いころには、そこで水浴びをしたり、水練を覚えたり、竹ざおで走る和船に乗ったりしました。今は、若い人たちと川とのつながりは、密接ではなくなっただと思いますね。今は水質も良くなっているようなので、もっと子どもたちも近づけるような、そういう川になったらいいと思います。

———私たちも今、「水防災意識社会」と言って、そこに流れている川がいざという時には溢れるかもしれない、ということを常に意識しながら川沿いに住むことが大事だということを伝えていく取り組みを、今の須藤市長ともやらせていただいているところです。そこにも通じる話だと思いつながりながらお聞きしていました。水浴びをしたりボートに乗ったりなど、日頃の生活の中で川で遊んでいたりと、その川を知ることにつながりますね。



「るるぶ」筑西市版

濱野 そういうことで、色々なことをきっかけにして、もっと親しめるようなところになればいいなと思います。今はサケが遡上してきていたり、先日、筑波山から日が昇る写真が新聞にも出ていました。

——ダイヤモンド筑波ですね。

福田 遊水地がこんなふうになるとは、当時は全く思っていませんでした。こういうのも、身近な話題になる一つのきっかけになると思います。



母子島遊水地完成時

——そうですね、こういうのをきっかけにして母子島が人でにぎわえば良いですね。激特事業で、地域の安全の向上とにぎわいの創出とを兼ね備えた整備ができれば良いなと思います。



母子島遊水地と桜（現在）

【最後に一言メッセージを】

——最後に一言ずついただきたいと思います。福田さんには、私だけでなく現職の国土交通省の事務所長に対するメッセージを。



里村下館河川事務所長

濱野さんには、これから災害に向き合っていく必要がある、現職の首長さんたちに対するメッセージをお願いします。

福田 私たちが育った時代とは、時代環境も組織も違いますから、事務所長の心構えとしては、今まで常識的に扱ってきたこと

を、もう一度疑ってかかるという気持ちを持ってほしいということです。「計画でこう決まっています」というだけで終わらないで、本当にその「計画」が、実際に起こっている現象に十分対応できているのか。そういうことを振り返ることが必要な時代に入っているのではないかと考えています。それから、いい意味で、色々なことにチャレンジをする気持ちを持っていてほしいと思います。

濱野 我々のころは、年に1回、鬼怒川沿いの市町村長が集まる会がありました。そういう会合をして、各市町村長の意見を直接聞くことで、各地区の状況が身近になると思います。そういう機会をまた持ってもいいと思います。

——今日は、貴重なお話を聞かせていただいて本当にありがとうございました。今日お聞きした話をこれから私たちも活かしていきたいと思いますし、筑西市や地域の方々にもお伝えしていきたいと思います。

インタビュー 2

昭和 61 年 8 月の洪水時に水防活動に尽力され、現在も水防に携わっておられる筑西市の宮川昌己氏（現消防団長）、齊藤幸男氏（現副団長）、鈴木健一氏（現副団長）の 3 名の方々に、国土交通省下館河川事務所副所長（技術）石田和也が当時の活動の様子や現在の水防団の抱えている課題などを伺いました。

旧下館市（現筑西市）水防団

昭和 61 年洪水当時、旧下館市の水防団員として、水防活動や避難誘導、救助活動を実施



宮川団長



鈴木副団長



齊藤副団長

インタビュー（敬称略）

筑西市消防団 宮川昌己（消防団長）

齊藤幸男（消防団副団長）

鈴木健一（消防団副団長）

—— 【聞き手】 石田和也（下館河川事務所副所長）

—— まず、昭和 61 年 8 月の水害で皆さんが行った水防活動についてお聞かせください。

【下館市内での活動】

宮川 この地域の水防活動は、兼任水防団である消防団が担っています。昭和 61 年の時の消防団は、当時の市町村別に下館、明野、関城、協和と分かれていて、下館には地区別に川間、竹島、養蚕、嘉田生崎など 11 の分団がありました。

あの日、水防活動を指揮する消防団長は、五行川が警戒水位を超過した 8 月 4 日の 18 時頃には、すでに市役所に詰めておられて、命令・指揮は、私のいた竹島分団も含め、そこから各分団に出されました。消防団には、避難に関する情報を市民に伝

える役割もありました。避難指示は早いだろうということで避難勧告を発令した

のだと思いますが、水位上昇がすごくて、詰め所にいる分団長がこの状況では無理だ、かならず越水するというので、避難指示のつもりで、住民に避難を呼びかけました。

そのうち、五行川だけでなく、あちこちで水が溢れてきました。竹島小へ避難するように、消防のマイクをつかって放送しましたが、初めて避難する人が多かったので、



流水の中での避難状況（下館市）

住民は信用しませんでした。寝ているところに水がひたひたと来てから起こされた、という人も結構いました。

私と消防団員が3人で(避難できなかった)おばあさんの家のところに行って、水道のホースをおぶい紐にして、おぶって避難させました。その水流が半端でなくて凄かったのですが、私は道を知っていたので、なんとか電柱につかまりながら避難所までたどり着きました。

——水防活動で土のうを積んだりしたのですか。

宮川 当時は、大雨が降ると五行川から先に水が溢れだしました。

竹島地区は周りに比べて低くて、水が集まりやすい場所でした。水位の上昇が早く、水防活動はあまりできませんでした。実施



左から鈴木副団長、宮川団長、齊藤副団長

した水防工法は、木流しくらいです。木流しの木は、市役所の庭に生えていた木を切って使いました。

【明野町での活動】

鈴木 私は、明野だったのですが、明野には村田、古内、築地・鷺島、宮後、上野、海老ヶ島の6分団あって、私が所属した村田分団は、夜中の12時頃のサイレンで詰所に集合しました。車庫から消防車を出して団員を迎えに行ったのですが、その



明野町赤浜地先の越水状況

時にはもう、低いところは浸水していて、ガードレールで、かろうじて道だとわかる状況でした。それから赤浜地区に行き、市役所がダンプで運んできた土で土のうを作り、小貝大橋の堤防が低くなっているところに、3段に積んだのですが、今のように鉄筋で固定はしなかったように記憶しています。そうこ

うしているうちに水位が上がって、土のうが流されてしまいました。

——集まった人は、何人くらいだったのですか。

鈴木 各分団は定員20名ですが、私のところの村田分団は、当日不在にしていた団員もいたので、集まったのは15~16人くらいだったと思います。赤浜の水防活動には、地元の上野分団のほかに、村田、築地・鷺島の各分団が駆けつけたと記憶しています。

土のうが流されてから一旦退避して、上流の古内地区に行きましたが、そこはすでに、ナイアガラの滝のように連続して溢れていました。水防活動ができる状態ではなかったので、水に浸かっている商店の商品を上上げるのを手伝ったりした後、下川中子、川崎地区に行って避難を呼びかけて、何人かは車に乗せて避難させました。

若い人や子どもは呼びかけに応じてくれましたが、お年寄り浸水に慣れていたせいか、なかなか言うことを聞いてくれませんでした。

【母子島での活動】

——齊藤さんは、どちらにおられたのですか。

齊藤 母子島地区にいました。母子島は、それまでも何度も水につかって、慣れっこになっていて誰も逃げませんでした。母子島は堤防がなかったので、自然に水が入ってきて、近くに車を止めるところもありませんでした。一丁田地区では、ちょうどお葬式の準備をしていたところがありましたが、家の1階が水に浸かって、2階に上げた棺桶をもう一度舟で移動なんてことができました。



浸水の状況(母子島)

県警や自衛隊も来ましたが、結局、地元を知らないで、避難の誘導は地元の消防団がや

りました。ホバークラフトも来ましたが、風で梨が落ちたり、稲の穂がだめになってしまうので、止めてく

れと言いました。結局、当時はボートで助けられた人が多かったです。

——2階に避難していてもだめでしたか。

齊藤 母子島は、2階も浸かったのでだめでした。

宮川 屋根の上に人が上っていたという記憶があります。今は当たり前のように堤防がありますが、当時は堤防がありませんでした。今思うと不思議です。

齊藤 母子島の人々は舟を持っていて、天井裏や軒下にぶら下げてありました。

宮川 小貝川がたびたび水にやられていたので、分団でも舟は持っていました。

【避難について】

——昭和 61 年の小貝川の出水では、下館市付近を中心に雨が降ったので、あっという間に水位が上昇して、逃げるための時間がなかったかもしれませんね。当時の記事を読むと、明野で 1,000 人くらい救助されたようですが、その時の状況を教えてください。



自衛隊による救助活動

齊藤 逃げる人がいなかった。

鈴木 最終的に舟で避難というパターンが多くなりました。舟で避難させるために、1 軒 1 軒まわりました。

宮川 犠牲者がでなかったのは、逃げ方が上手だったのかもしれませんね。

あと、川から溢れた水は、油が浮いていたり、糞が流れていたりして、汚なかった。役所で握ってくれたおにぎりを下館小学校まで持っていくのに、水の中を頭にのせて持って行きました。一人食中毒が出たようでしたが、衛生的な状態ではなかったと思います。数が決まっているので、消防団の食べる分まではありませんでした。ようやく、カップ麺があったので、(飲料) 水に浸して食べました。

齊藤 当時は、道路が水浸しなので、車で避難所へ行くこともできませんでした。当然限られた物資しか届きません。

——避難所でその他困ったことはありましたか。鍵が開かなかったとか、毛布がなかったとか。

宮川 地域の公民館を管理している人のところに情報は入っているので、鍵が開かないことはありませんでした。ひとつ言えば避難した住民には毛布はわたりましたが、消防団員は、床に段ボールを敷いて、段ボールをかぶって寝ていました。

——避難所では誰が避難できていないかとか、情報はあったのですか。

宮川 リストまでは用意できてなかったような気がします。逃げ遅れた人の情報が、公民館(避難所)の電話などで入れば、救助に出かけました。

【最近の水防活動における課題】

——最近の水防団は、人集めが大変だとか、若い人が減っているとよく聞きます。人の確保や人材育成でご意見はありますか。

鈴木 水防活動のような、ボランティア的な活動をする人がいなくなったということかと思います。

宮川 今は、水防団を知らないという若い人もいます。市役所職員で 40 数名が消防団員になって、水防団員を兼任しています。そういう風にしないと集まらない状況です。あと、最近雨の降り方が変わってきているように思えます。形式張った訓練でなく、実践に役立つ訓練をしないとないと思っています。

——そうですね。どこの堤防が切れたら何をするとか、このタイミングなら何をする、などを考えながら実践的な訓練をしていただけると頼もしいですね。

宮川 大きな災害のときに亡くなっている消防団員もいるので、自分の部下である消防団員には、やみくもにやってはいけないと言っています。必ず、現実的な問題ができます。

——お話しいただいた水道のホースでおばあさんをおぶったときにも、電柱につかまって流されるのを防いだということですか。

が、一步間違えば、命に関わることだったのではないですか。

宮川 そのとおりです。ところがああいう状況になると消防団員は「それでも、ここで行かない」と思ってやってしまうところがあります。消防団員が亡くなれば元も子ありません。上の責任も問われます。団員の安全はしっかり考えないといけません。

——団員の研修とか勉強会とかはやっているのですか。

宮川 現場にいったときの心構えとか、勉強会をやっています。消防団が勉強するようなプログラムとかそういうものがあれば、教えてくれと言っています。浅い知識でやったら事故につながるわけですから。

【今後の取り組みとして】

——昭和 61 年のときは、みなさん、川のどこが危ないとか、浸水被害が起こりやすい所はどこかという情報を共有していたという話がありました。平成 27 年の関東・東北豪雨のあと、堤防と一緒に点検する共同点検などを始めています。このように情報を共有していくということは重要だと思いますので、これからも続けていきたいと思っています。

齊藤 当時は、母子島には消防団員がいなかったと思います。各地区に一人いないと勝手がわからなくて困るので、今は一人はいるようにしています。

——外国人の方への呼びかけは、どうしていますか。

宮川 消防団に外国人の方が一人います。外国人への対応ということで入れたわけではないでしょうが。一昨年の鬼怒川出水の資料をみたら、外国人の方も何人か助けられたとあったので、必要なことだと思います。

齊藤 言葉が伝わらなくて、逃げない人もいたようです。

宮川 外国人に限らず消防団が呼びかけても住民が逃げないことは問題です。災害に直面

しないとわからないかもしれませんが、住民自らが情報を正しく理解して、早めに行動してくれると良いと思います。避難に関する情報提供も、避難勧告よりも、最初から、避難指示にしてほしいくらいです。

——国土交通省も堤防整備などのハード整備だけでなく、水防や避難対策などのソフト施策を合わせてやっていく必要があると、これまで以上に強く言っています。さきほども雨の降り方が変わってきたといったお話がありましたが、ハードで防ぎようのない水害があることを前提にして、住民や地域はそれにどう備えるか、水防災意識社会の再構築に向けて、みなさんと一緒に考え、行動していきたいと思っています。

【最後に】

——最後に水防活動を行う立場から、河川管理者に要望などありますか。

宮川 平成 27 年の水害で鬼怒川の水がこんなに上がってくるとは思いませんでした。土手を越えて水が入ってきたわけですが、その時点時点で情報を入手して、早めの対策を取っていくことが重要だと考えます。そのための訓練や勉強会をしていきたいと思っています。河川管理者や自治体等の関係機関との連携を深めていくことが重要ですね。

——私も、水防活動を行う皆さんとの情報共有や連携を深化させることが、被害を小さくする大きなポイントだと改めて認識しました。今後ともよろしくお願いします。本日はありがとうございました。



石田下館河川事務所副所長

インタビュー 3

昭和 61 年 8 月の洪水時に浸水した地域に住んでいて被害に遭われた筑西市の仁平芳之氏、渡邊節子氏（母子島地区）、上野怜氏（旧下館市内）、河添良美氏（旧明野町）の 4 名の方々に国土交通省下館河川事務所調査課長 星尾日明が当時の洪水の状況や避難の様子について伺いました。



上野怜氏(旧下館市)



仁平芳之氏(母子島)



河添良美氏(旧明野町)



渡邊節子氏(母子島)

インタビュー（敬称略）

仁平芳之・渡邊節子（母子島地区）

上野怜（旧下館市）

河添良美（旧明野町）

———【聞き手】星尾日明（下館河川事務所調査課長）

【昭和 61 年水害時の浸水被害の状況】

———昭和61年水害時の状況についてお聞きします。

仁平 浸水が始まったのは、明るくなってからです。それまでにああいう水を経験したことはありませんでした。家の軒も冠水して、コンバインやトラクター等の農業機械、乗用車、軽トラまで、みんな浸かりました。

渡邊 私は母子島という、一番いつも水害に遭っている場所柄、家は道路から1m以上高くしていたので、何となく安心かなという感覚でしたが、床上どころか、前の家は屋根の頭の部分しか見えないという状況でした。

いつもと雨の降り方が違うので、車などは高台にある実家の方に移動していました。地区の北の方に車を避難した人は、水

位が上がってもここは大丈夫だろうと思っていたのですが、全部水没してしまいました。

仁平 私が玄関に見にいくと、もう胸のところ



母子島の浸水状況

まで水が来ていました。母が動けないので2階に連れて行って、それからガスと、米、みそ、しょうゆを2階に運んで。家の

中はしっちゃかめっちゃかでした。

上野 私は当時教員で、竹島小学校に勤務していました。職員では一番近くに住んでいたのので、避難場所になっている体育館の鍵を開けるようにと電話がかかってきたので、車で行って体育館を開けました。今日は、その翌年に作った「竹島小学校の100年の軌跡」というアルバムを持ってきました。この中に子どもの作文もあって、当時の状況が分かるかなと思います。

【竹島小学校 100 年の軌跡より抜粋

当時の児童の作文】

真夜中にサイレンが鳴り、同時に「避難して下さい！」の放送がありました。

避難しようとしても、どこも水がいっぱいどこへ行って良いのかわかりません。

竹島公民館に行って休んでいました。水は増える一方です。

水の中を何度か家を見に帰りましたが、水はもう床上になっていて、家の中に入れません。その夜は公民館に泊まり、次の日は水が引きました。

しかし、夜になって電気もつかず何もできない。水道の水は濁っていて飲めない。そんな日が2、3日続きました。

雨も降り続くとすごいことになるんだなと思いました。もう、こんなのは、いやです。

当時、3階校舎の屋上に上ると、勤行川と小貝川の水が押し寄せてくる様子が目の前に見えました。旧下館市では、特に酷かったのは勤行川の方で、完全に畑も水に浸かり、用水堀も水がいっぱいでした。学校

には、自衛隊のボートがおにぎりを届けに来てくれました。

河添 当時、私は結城消防署に勤務していましたが、小貝川が危ないという情報が入り、家の方に戻ってきたときには、黒子橋の上はテレビ局の車でいっぱいでした。橋の上流左岸の大林地区では、堤防から越水していて、ナイアガラの滝じゃないかと思うような状況でした。

家に帰って、妻と母と祖母と子ども二人を高台の鳥羽小学校へ避難させました。一時増水は落ち着きましたが、その後、赤浜の決壊の逆流で床上 1m20cm まで来てしまいました。大林からの越水だけだと、家の角あたりで止まっていたと父は言っていました。昔は水害がたびたびあった地域なので、納屋の軒先には舟なども用意はしてありましたが、何年も使っていないので水がしみてきて、水をかきながら使ったと聞きました。

当時は下館消防署の救助艇も来ていて、自分は案内人のような役割をして、逃げ遅れた人を舟に乗せた記憶があります。ただ、水害に慣れていて、避難したがるような人もいたようです。

以前は堤防もあんなに高さがなかったので、よく溢れていた。今はきっちり堤防が出来ているので、水をもたせて決壊するから一気に来る。昔はそういう水の出方ではなかったんだと思います。

———当時、行政からの避難情報は、どのように伝わってきたのでしょうか。

河添 あの頃、防災無線はまだなかったです。

渡邊 何となく各自の判断だったですね。

河添 消防も時間をおいて、明野であれば小貝川の黒子橋の水位を随時調査に行っていました。

渡邊 うちの方では、年配の方が何時間おきとかに水が来ているところに石を置いてくるんです。そういうふうにして、何時間でどのくらい水位が上がったというのをよくやっていました。

あと、地元で降っている分には心配ないと。栃木県で雨がいっぱい降っているとみんな警戒するんです。この時も上流で降ったから心配していましたが、止まなかったし。

———そういう情報は入ってきたのでしょうか。

渡邊 今みたいに情報がないので、どこで水位が上がるとかはわからなくて、まだむこうで降ってるな、とか、身近なところでここまで来ている、とかを見ていました。

河添 上流で降れば、大体次の日に増えているとか、知恵があったからね。

仁平 印を付けただけの水位計があって、何時に行ったらここまでって、帳面につけたりもしました。

———それだけ皆さんが意識して、上流の雨や川の水位を気にされていたということですね。

【避難の状況】

———この時の避難の状況について教えてください。

渡邊 主人の母親と子供たち、犬とかは私の実家に避難させました。主人と私は家で、最初は食堂のテーブルの上に乗せたりしていたんですが、水位がどんどん上がってきて。もうどうしてもダメになって、兄が繋いでおいてくれたゴムボートに乗って土手の方まで行きました。

一面、水になってしまったら何もわからないですね。でも、あの水害では亡くなられた方はいなかったんですよ。水に襲われ



洪水に流されてきた豚

たのでなく、じわじわ水位が上がっていく水害だったから。ドラム缶だとかがじわじわと流れたりとかはありました。

仁平 豚なんか泳いできたりもしました。

上野 けが人とかそういうのは出なかったです。あれは夏休み中でしたが、授業をやっている状況とかだとまた違っていたとは思いますが。

当時の資料では、町内ごとに思い出を書いていて、柳町ではこう書いてあります。

勤行川の最高水位が 4m90cm。柳町に午前 3 時 35 分ごろ避難命令が出る。軒下までつかった家や床下浸水まで被害は様々であるが、幸いにも負傷した人はいなかった。

旧下館市の方では、小貝川というより、勤行川の方の氾濫を、みんな恐れていたんですよ。

———当時は 2 階建ての家というのは結構あったんですか。

河添 2 階建ての家はありましたが、平屋建ての家もありました。平屋でも納屋が 2 階建てだったりする場合もあるので、納屋の方に避難していた場合もありました。

———川が溢れ出してから、一気に水深が上がったと思いますが、その状態になるまで避難しなかった方もおられたというのは、どんな感じをお持ちだったんでしょうか。

仁平 今までそういう経験がないから、今回も大丈夫だろうっていうのはあったわけですよ。これは・・・と思った時には、あっという間に水が来てしまったと。

河添 私は、年寄りと子供がいましたが、先に高台に避難させました。

仁平 うちの母が 2 階にいて、ボートが来るのを待って、それで土手まで行ってもらって。私は泳いで行きました。

———避難している時に印象に残っていることはありますか。水が引いたら、避難所からすぐに家に戻ったということでしょうか。

仁平 戻っても、家には入れません。

渡邊 水でひっくり返ったりしていて、家の中がごちゃごちゃなので。避難先から家に通って、後片付けをしました。

仁平 一週間や十日じゃ終わらなかったです。

渡邊 後片付けはめいめいでやっていました。水が引くと同時に一齐に流さないと、乾いて固まってしまったらもう、どうしようもないです。

河添 私も、水の引き際には一緒に掃除するんだ、ということを、祖父母あたりが話していたのを聞いたことがあります。

渡邊 うちの、高校を卒業してから全然会わなかった人が、朝早く大工さんだというご

主人と二人で来てくれました。商売柄、昼はあるからと言って入れて行ってくれて。床は抜けて、ドアも開かない、引き出しも開かないというのを、全部直していつてくれたことは、今でも思い出すと涙が出てきます。

一番子どもたちがかawaiiそうだなと思ったのは、アルバムが全部だめになったことです。同級生とかが、一緒に映っているのがあるよと届けてくれたのはありがたいなと思いました。

本当は、逃げ出すときにそれくらい持って行けば良かったですが、そんなふうにならなと思わなかったのです。

【水害後の備え】

——61年の水害を受けて何か変わった、準備するようになったことなどはありますか。

仁平 水害ばかりではないけれど、保存食はこの家も用意するようになりました。

河添 うちの方は、家を建て替える人が結構多くて、土地をいくらか高くしたということがあります。私のところは床上1m20cmでしたが、建て替えの時には1m近く上げたと思います。

周りの家も高くして建てたところもあれば、1階は水にぬれても良いような感じにして、2階を居住にした家もありました。

【激特事業と生活再建】

——母子島で激特の事業を進めたときのお話をお聞きます。

渡邊 被害に遭わなかった人には、そんなことはやりたくないと言われていました。

仁平 市役所に行って何回も会議を開いて…自治委員は集落にひとりいて、私も丁度やっていた時でしたが、なかなか決まらなくて、反対していた集落もありました。

——結局、5地区でまとまっていこうと決断するに至った気持ちというのは、どんなことだったんでしょうか。

仁平 ここで反対し



移転地の造成工事

てしまったら、また水害に遭わなきゃならないということで、いろいろ話を煮詰めていってやっと決まった。旭ヶ丘に家を建てるのも、昔の人がまだたくさんいたから、鬼門屋敷は嫌がるので十字路はつくらずにT字路にするとか、鬼門屋敷のところは公園にするとか、前も後ろも30cm づつ引っ込めて花壇をつくるという街づくりをやりましょうということで、ずいぶん苦労しました。

河添 まとまった集落は、今は穏やかにやっているんでしょうか。

仁平 5集落が一緒になって、最初は元の集落ごとの行事は別々でしたが、集落全体の行事というのをつくりましょうといって、どんど焼きやカラオケ、花見などをやったりしました。やはり交流がないとコミュニケーションがとれなくてだめなので。

河添 ダイヤモンド筑波はニュースなどにも良く出ていますよね。

渡邊 NP0の人たちが、子どもたちを集めて町の観察会とかをやるときは、私たちも行って、いろんなことで協力したりもしています。

【子どもたちに伝えていきたいこと】

——みなさんの水害の経験を通して、次の世代の人たちに向けて伝えたいことなどをお聞きます。

河添 自治会の研修会でも、毎年、水害への対応策ということをやっています。

渡邊 集団移転で安心できる場所にいると疎くなってしまいうるか、危機感がなくなってきたから、そういうことも必要ですね。

河添 私は当時のことが頭にあって、一昨年の常総市の線状降水帯の雨のときには、これはダメだと思って車を動かして備えました。先日（平成29年10月）の台風21号の時も、1週間くらいぐずついていたところで超大型というので、車を移動して、米を棚に上げました。

あと、今は常時パソコンで水位状況を見えています。自分で状況を把握して、地形とか、

堤防の補強状況なども聞いておいて、ここまでならまだ大丈夫だなとか、これからは少し準備しようとか、そういう判断ができればなというふうには思っています。

上野 人は、自分の家が心配で途中で見に行くということを意外とすると思います。でも、見に行くことで犠牲になっている人もいることから考えると、家の状況が行かないでもわかるような、例えば防犯カメラの画像が公民館で見られるというような仕組みを作っておけばいいのではないかと思います。

——みなさんの地域では、昭和61年に水害を経験されていますが、そういう場所であっても、世代が変わると意識は薄れて行ってしまうものなのでしょうか。

渡邊 それはあります。やはり、経験した人と、しない人では意識は違います。私は水害の後、旭ヶ丘に来てからも何年も、雨の音を聞くと、自分で意識してないんですが、ぞっと鳥肌が立っていたんです。でも、だんだんそれがなくなってきました。

河添 自分が水害や避難の話をしたりすることによって、あ、川はこういうふうに見えるんだってことを、少しでも子どものうちに分かれば意識は変わると思います。

——今回もですが、実際に経験した皆さんに話して頂いて、そのお話を広く伝えていくことはすごく重要だと思っています。

【地域の将来について】

——最後に、この地域にこうなってほしいというようなメッセージ、将来に向けての思いをお聞きます。

仁平 川というのは、今流れているところだけではなくて、昔から氾濫したりして動いているわけですね。未来には、川の水が増えて土手が壊れることがないように川作りをやって頂ければもっと安心できるんじゃないかなと思います。

河添 私は小貝川の左岸に近い地域なので、これからもずっとこういった心配は続くかと思っています。なので、小貝川の改修工事の状況や、地形のことを正しく理解をして、自分はもちろん、後世にも、集落にも伝えたいなと思っています。

上野 勤行川のほとりを散歩していると、結構点検に回ってくれているのをみかけます。ああいうことをこまめにやってくれているのは安心できるし、これからも続けていってほしいと思います。

——堤防の整備も進めて行きますが、現在ある堤防の機能を維持管理していくことも大変重要なことです



星尾下館河川事務所調査課長

し、地域の方にもそういうふうに河川を見て頂けるのはありがたいと思います。それとともに、水害の歴史や、自分の命を守るという学びと行動も重要だと思いますので、皆さんの経験や、そういったことをこれからの子供たちにも伝えるよう機会をつくって行きたいと思います。今日は一日ありがとうございました。

昭和61年小貝川水害・激特事業と これからの水防災を考える

シンポジウム概要

- 実施日時 平成 30 年 1 月 30 日（火）

13：00～15：00

- 実施場所 茨城県県西生涯学習センター 多目的ホール

- プログラム

13：00～13：05 開会挨拶

13：05～13：15 小貝川 30 年のあゆみと激特事業着手 30 年事業紹介

13：15～14：10 【第 1 部】 こどもとおとなのトークセッション
～学びと経験をつなぐ～

■嘉田生崎小学校 4 年生のみなさん

■上野 怜（元竹島小学校教員）

酒井千佳（お天気キャスター）

里村真吾（国土交通省下館河川事務所長）

猪瀬弘明（筑西市土木部長）

福田昌史（元建設省下館工事事務所長）

宮川昌己（筑西市消防団長）

渡邊節子（旭ヶ丘地区在住）（敬称略, 五十音順）

14：20～14：55 【第 2 部】 お天気キャスターとつくろう マイ・タイムライン
～自分の逃げ方を考えよう～

■酒井千佳（気象キャスター）

14：55～15：00 感謝状贈呈式

15：00 閉会挨拶

- 会場内展示

小貝川洪水・激特事業紹介パネル展

- 参加者概要

参加者数 260 名

（うち、嘉田生崎小学校 24 名、養蚕小学校 62 名、竹島小学校 30 名）

開会挨拶

筑西市長 須藤茂

みなさん、こんにちは。只今ご紹介を頂きました、市長の須藤でございます。今日は小貝川の激特事業 30 周年のシンポジウムということで、嘉田生崎小学校の 4 年生のみなさんを中心に、地元の方にお集まりを頂きまして、ご厚意に感謝申し上げる次第でございます。

30 年と言いますと、あっという間ということもありますけれども、昭和 61 年 8 月には非常に大きな水害、災害が起きてしまいました。そして皆様ご存知のように、平成 27 年。今から約 3 年前。鬼怒川において大きな水害が起きてしまいました。自然の恐ろしさ、それは身に染みて皆さま方も体験しております。

今言いましたように、鬼怒川では平成 27 年に川島地区から船玉地区に大きな水害が起きました。その 30 年前に、小貝川で水害がおきました。当時産まれた方ももう 32、3 歳になっておられるわけでございます、非常に大きな災害でございました。

今日は、NHK で、皆さまもご存じだとは思いますが、気象予報士の酒井さんに来て頂きました。そして嘉田生崎小学校の 4 年生、それから、当時下館市と言いましたが、当時の下館市の市長であられました濱野さんにも、おいで頂いております。そして当時の下館の工事事務所長でありました福田さんにも来て頂きまして、みなさんでこの水害、災害を、一生懸命勉強をしまして、そして頭に叩き込んで、今後、いつ何時このようなことがあっても行動ができるようにしていきたいと思っています。時間の許す限り、皆さんと共に勉強をしたいと思っています。よろしくお願いを申し上げます。



事業概要

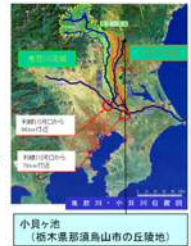
小貝川30年のあゆみと激特事業着手30年事業紹介



小貝川流域及び河川の概要

概要

- ・流域面積：1,043 km²
- ・川の長さ：112 km
- ・流域の71%が平地
- ・平地の93%が耕作地(658km²)
- ・小貝川の河床勾配は中流の筑西市(旧 下館市)より下流は、1/2,000~1/3,000程度の緩流河川で上流は1/500となっており、水深や流速の変化が多い、河床材料は下流は砂で上流は砂礫となっている。



小貝川の源流

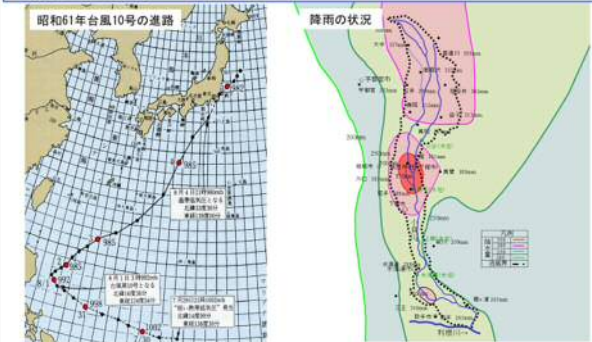
- ・栃木県那須烏山市大赤根の喜連川丘陵(標高約187m)小貝ヶ池が小貝川の源流。



小貝川の源流 小貝ヶ池

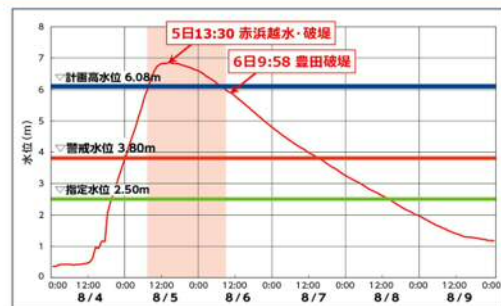
気象状況

昭和61年の台風10号の影響により、小貝川では 8月4日9時頃より本格的に雨が降り始め、雨量は24時間で388mmを記録



水位の状況

黒子観測所で5日8時に計画高水位を超え、過去最高の6m86cmを記録。



小貝川黒子地点の水位変化

流域の氾濫状況

小貝川沿川では約4,300ha、約4,500戸が浸水



小貝川激甚災害対策特別緊急事業(激特事業)の概要

事業概要

- | | |
|-------------------------------|-------------------|
| 事業期間・・・昭和61年度から平成2年度 計5カ年間 | 主な内容・・・①母子島遊水地の整備 |
| 総事業費・・・約208億円 | ②小貝橋の架替 |
| 事業区間・・・小貝橋(49.0k)から豊後橋(58.6k) | ③築堤護岸・掘削等 |

小貝川激特事業位置図



本日で小貝川の起工からちょうど30年を迎えます。

起工から30年を経て

大きな災害を克服するため、治水を目的に整備された母子島遊水地ですが、30年という時間をかけ、いつしか人が集まる、楽しい空間へと生まれ変わってきました。
また、人々が集まり楽しむ空間は、小貝川の流域全体に広がっています

ダイヤモンド筑波



小貝川起工30年を語り継ぐ

特別インタビュー

災害・災害対応・激特事業へ、様々な立場で関わった方々へのインタビューを行っています



特設ホームページ開設

特別インタビューやシンポジウムの内容について紹介するホームページを開設しています



<http://www.ktr.mlit.go.jp/shimodate/shimodate00419.html>

Facebookによる情報発信

鬼怒川・小貝川の旬の情報をほぼ毎日お届けしています。
本日のシンポジウムの様子も掲載予定。
ぜひフォローして下さい！！

第1部

こどもとおとなのトークセッション ～学びと経験をつなぐ～



⌘ 洪水のことを調べたこどもたち ⌘

嘉田生崎小学校4年生のみなさん

⌘ 洪水を乗り越えたおとなたち ⌘ (敬称略、五十音順)

猪瀬 弘明 (筑西市土木部長)
上野 怜 (元竹島小学校教員)
酒井 千佳 (お天気キャスター)
里村 真吾 (国土交通省下館河川事務所長)
福田 昌史 (元建設省下館工事事務所長)
宮川 昌己 (筑西市消防団長)
渡邊 節子 (旭ヶ丘地区在住)

〔進 行〕

豊原 裕子 (下館河川事務所調査課)

〔進行〕 これより、シンポジウムの第一部「こどもとおとなのトークセッション」を開始します。
嘉田生崎小学校 4 年生のみなさん、よろしくお願いします。



👤 僕たちは、4 月から 11 月まで総合学習の時間に、小貝川の洪水の様子や、地域にある母子島遊水地の様子について調べてきました。今日は調べてきたことを発表します。

まずは、小貝川でおこった過去の洪水について発

表します。



👤 この表は、今まで、小貝川が氾濫した年の表です。小貝川では、もう何回も洪水が起きています。私たちは、今までに筑西市が受けた洪水の中から、昭和 61 年 8 月の洪水について調べました。

👤 昭和 61 年の小貝川の洪水の原因となった台風の様子について発表します。台風 10 号は、大雨の台風でした。北からの冷涼な高気圧性の気流と、急速接近した台風がもたらした高温多湿な気流によって、台風から変わった低気圧にともない、前線が形成されました。この前線と、北の高気圧の存在により、低気圧の移動速度が極めて遅くなり、豪雨が集中的に持続しました。

👤 次に、その時の雨の様子について発表します。台風 10 号による洪水は、関東北部では 8 月 4 日の未明から始まりましたが、時間雨量が 10 ミリメートルをこえるようになったのは、19 時ごろからで、時間雨量 10 ないし 20 ミリメートルの雨が、夜半まで続いたそうです。その後、5 日の 0 時から 4 時にかけて、さらに強くなり、時間雨量は 30 から 60 ミリメートルとなり、6 時ごろにはほぼやんでいて、総降雨量は 200 ミリメートルから 300 ミリメートル以上になっていました。またこの時、小貝川の上流でも 300 ミリメートルを超える雨が降っていました。

👤 これが、私たちが調べた台風や雨の様子です。ここで、お天気キャスターの酒井さんに質問です。この時は、どうしてこんな大雨になってしまったのか、この時のお天気の特徴を教えてください。



〔酒井〕 この時がどんな大雨だったかという、特徴ですね。今みなさんが、たくさん調べて発表してくれた通り、と言ったらもうそれでおしまいなんですけれど、とても詳しく調べてくれていて、分かりやすくまとめてくれたと思います。

少しつけ加えるとすると、1 時間に 20 ミリ、30 ミリの雨って、どういう雨か分かりますか。大体、20 ミリから 30 ミリの雨っていうと、強い雨っていうふうに表現されます。この、強い雨の場合、傘をさしていても濡れてしまうような、そんな雨の降り方になります。でもこの時は、夜中になってから雨が強まって、1 時間に 30 ミリから 60 ミリの雨になったと調べてくれていました。30 ミリから 50 ミリの雨を、激しい雨というような言い方をします。これはどれぐらいの雨かというと、バケツをひっくり返したような、そんな雨の降り方になります。大体 1 時間に 2~30 ミリの雨っていうと、みん

なにも経験したことがあると思います。ちょっと傘を差しても濡れてしまうな、とか、この雨外に出たくないなとか、そんな雨の降り方です。次に、1時間に50ミリ以上の雨を非常に激しい雨っていうんですが、この非常に激しい雨が降った時なんかはもう、寝ていても起きてしまうような、そんな雨の降り方です。滝のように降るといように表現される、そんな雨の降り方なんです。この時はそんな、強い雨、激しい雨、非常に激しい雨が、長い時間、降り続いていたんですね。発表してくれたように、夜から明け方にかけて、長い時間、そんな雨が降り続いたことによって、全体的な雨の量が300ミリを超えたということになるんですね。先ほどもお話してくれましたように、この時どんな状況だったかっていうと、台風から変わった低気圧がやってきたんですね。台風から低気圧に変わった時っていうのは、これまでも災害が何度も起こっています。ちょっとみなさん、油断しがちだと思うんですが、もともと台風っていうことで、やっぱり雨のもととはたつぷりと持っているんです。暖かく湿った空気って言うてくれてましたけれども、そういう雨のもとになる空気をたくさん持っている低気圧がやってきて、その時の気圧配置は、なかなか動かなかったんです。それでその空気がこの辺りに大量の雨をもたらしてしまったと、そういうことになると思います。



ありがとうございました。



次に、その時の川の状況について発表します。大雨によって、5日0時に小貝川の黒子地点の水位は、警戒水位3メートル80センチメートルをこえ、3メートル91センチメートルとなったそうです。その後も水位は上昇し続け、黒子地点では、過去最高の水位になり、6メートル86センチメートルが8月5日14時に記録されていました。



洪水は、大雨が降って川にその水がたまるとおきるものです。これにより、下館市、現在の筑西市の約4分の1が洪水になりました。また、記録的な集中豪雨に見舞われた小貝川の堤防が壊れ、町に水が流れこみ、洪水になりました。



次に、その時の被害について発表します。小貝橋北方と南方に4日以上浸水していた地域が見られますが、北方のものは排水路沿いの低地で、南方のものは堤防と農道に囲まれた相対的な低地でした。海老江付近より上流部の冠水日数は1日から2日以下でした。なお、小貝川右岸の下妻市中郷には冠水日数1日以下のところがありますが、ここは道路や水路の堤防に囲まれた相対的な低地で、内水氾濫が発生していました。



この洪水で、2トン、4トン、10トンのダンプや、4トン、6トンのトラック、また、ショベルカーや軽トラックが流されてしまいました。浸水した家は、4,500戸でした。



小貝川で起きた洪水は、人々を巻き込んで大変なことになりました。家は水浸しで、水が家の中に入ったから、水で洋服や食料もなくなってしまったので、「困ったな、どうしよう」と人々は言っていたそうです。

渡邊さんは、実際に、母子島で被害にあったそうですが、この時、どんなことが起きたか、どういうことが困ったか、教えてください。



〔渡邊〕 まず、私が体験したことをお話ししたいと思います。

私が住んでいた母子島というところは、小貝川と大谷川が合流するところでした。台風などで雨が降ると、川の水位が上がり、逆流して道路が川のようになることがたびたびありました。61年の水害の時の雨の降り方は、それまでと全く違っていました。近所の人たちも、車の移動をしたり、騒がしくなっていました。私たちも、道路が通れるうちに家族3人と犬を実家に避難させました。主人と2人、家に残り、床上になる前に畳を上げたり、色々なものを台に乗せたり、とにかく高い所に上げました。門から家に上がる階段が、1段づつ見えなくなっていきました。押入れの上の段に乗せ、終わったころには床上まで上がってきていました。水が膝の上になったころ、冷蔵庫が倒れました。腰くらいになるまで色々やっていたのですが、奥でガシャーン、向こうでガシャーンと、積み上げたものが水の浮力でひっくり返ってしまいます。私の家は平屋づくりでしたので、それ以上やりようがありませんでした。家から出る時のために、2人で乗れるゴムボートを用意しておきました。玄関につないでおいたのですが、玄関からは乗れないので、げた箱の上に乗って外に出ました。堤防に着いた時には、たくさんの人たちが避難してきていました。みんなが心配そうに家の方を見ていました。その日から私たち家族は、私の実家でお世話になりました。

一番困ったことは、水がたくさんあるのに飲み水がない。昨日まで寝ていたお布団が水びたしで使えない。着るものもない。食事もできない。お風呂にも入れない。電気製品はもちろん使えない。一番つらかったのは、水に浸かってしまって、開かなくなってしまったアルバムです。墨流しのようになって、写っている顔が見られないんですね、形がないんです。形のあるものもありましたが。それが一番つらかったことです。

色々大変なことがありましたが、今は恵まれた旭ヶ丘という環境の中で安心して暮らせていることが、本当に幸せだと思っています。



ありがとうございました。



次に昭和61年8月の時の救助の様子について発表します。

救助の様子は、写真のように、ヘリコプターやボートなどで、家が1階だての人や、屋根の上にいる人を先に救助したそうです。

そして、逃げ遅れ、外に逃げられない人は、布団や服などを、屋根の上にもっていき、ボートが来るのを待っていました。夏で暑かったので、泳ぎながら救助の人が来るのを待っていました。消防団長の宮川さん、当時の救助活動の様子を教えてください。



〔宮川〕 水害っていうのを、みなさんは経験してないのでわからないと思うけれど、バケツの水を自分で被るような雨が降ったんです。傘を差しても、着てるものが全部濡れるくらい、すごい雨だったんです。

当時の状況ですが、今は筑西市ですけど、当時の下館市の協和町へ50号線で行く小貝川の橋と、小山の方に向かって坂を上ったところの高さが横塚の橋と同じ高さなんです。なので、両側が高いから、一番低い竹島地区、下館地区が、一番先に襲われた。

実際にどう助けたかという、実は61年のさらに40何年前にも、大水害があったんですが、そういう大きな被害があったにも関わらず、実はまだ、ボートなどの用意が全然できていませんでした。ですから、助けたのは消防署のボート。あとは消防署員、消防団員が徒歩により、お年寄りを背中に担いで避難させたっていうことが現状でした。

なぜそういうことになるかというと、水位が上がるときに、警戒水位っていう、川の水が増えてきましたよ、気をつけて下さいよっていう警戒水位っていうのがあります。それを過ぎると危険水位っていうのがあります。溢れますよっていう。その時に、消防団が避難命令を出したんです。ポンプ何台も合わせて、避難しなさい、避難しなさいって。ところが避難する人がほとんどいなかった。避難をしないから、水が来て慌てて逃げようとしても逃げられなくて、消防署、消防団が舟を送って、また、担いで人を助けたっていうことなんです。ですから、この間、3年前にあった鬼怒川もそうですけども、なってからでは遅いんで、避難の指示が出たら必ず避難して下さい。それが、みなさんの命を守る、大事なことです。それでもだめだったら、消防署も助けます。そういう、守って頂きたいことをひとつ言って終わりにしたいと思います。



ありがとうございました。



次に、避難所での生活について発表します。避難所は、小学校の体育館が指定され、たくさんの人が集まりました。避難所では、炊き出しが行われたほか、タオルケット、毛布、ハブラシ・コップ、救急箱などの生活用品、給水、ヤクルト、ジュースなどの飲み物や、米、パンなどの食べ物が配られました。何カ月も避難生活をおくっていた人もいたそうです。上野さんは、当時、避難所になった学校にいたそうですが、この時、どんな様子だったか、教えてください。



〔上野〕 この大災害が起きた時は、私は竹島小学校に勤めていました。竹島小学校っていうのはどういうところにあるかっていうと、西に五行川が流れています。東に小貝川が流れています。それで、学校のすぐわきに穴川用水路が流れています。当時、大雨が降って、五行川の水がいっぱいになってきました。それから、どんどん用水路が溢れてきてしまいました。

今、宮川団長から話がありましたように、危険です！早く避難して下さい！って、サイレンの音とともに、そういう広報車がどんどん回ります。みんな慌てて避難場所に、学校に来ます。大変な時にはまず逃げるので、準備しないでそのまま逃げちゃうんですね。そして、避難してきてから、あれを持ってこなくちゃ、と思い返して、家に帰ろうとするんです。でも、もう家は水びたしで、そこまで行くのも大変という状況でまた避難場所に戻って来る。そういう状況がありました。

じゃあ、避難所の中ではどういう生活をしていたのかですけど、体育館は畳じゃなく板の間です。ですから、学校にある体育用のマットを体育館にひいてそこで座っていました。でも、学校のマットってそんな数はありません。ですから、そのマットに座る人は、お年寄りを優先して、あとは床でした。ですから、避難した人の中では、避難する時に風呂敷を2、3枚用意しておけばいいなって言っていました。床でマットに座れないときは、風呂敷のうえで座ってれば、随分寒さも、痛さも違うと。それと、新聞紙を10枚ぐらい持ってくるんだって言う人もいました。新聞紙だと下に敷いても良いし、寒かったら寝ている上に新聞紙をかけても良い。そういうことで、風呂敷と新聞紙、これ

が大事だなんていうことを言っていました。もう一つ、落ち着いてきたら、家の人はどうかな、他の人はどんな様子かなって心配になってきます。電話をかけて様子を聞きたいんですが、電話がなかなかつながらないんです。今のように、携帯電話はありません。電話は学校の職員室にはありましたが、体育館から職員室まで行くのも大変です。とういことで、電話会社の方で、体育館に公衆電話を直接入れてくれて、それを使って、みんないろんな情報とか様子を聞いたりしていました。そういうことで、常日頃からやはり、何かあったらっていうことで準備しておくことが大事だなと思います。みんながいろいろ調べてくれたことをね、ありがたく思います。



ありがとうございました。



ではここで、これまでの内容をクイズでふり返ってみましょう。問題 1。昭和 61 年 8 月にあった台風 10 号の雨の量はだいたい何ミリメートルだったでしょう。1、30 ミリメートル。2、300 ミリメートル。3、3,000 ミリメートル。正解と思う番号に手を挙げて下さい。1、30 ミリメートルと思う人。2、300 ミリメートルと思う人。3、3,000 ミリメートルと思う人。答えは 2 の 300 ミリメートルです！



問題 2。小貝川の洪水が起きたのは、どのような天気の時だったでしょう。1、台風が近くにいる、大雨が降っていた時。2、雨がやんで、晴れていた時。3、台風は過ぎたけれど、雨が降り続いていた時。正解と思う番号に、手をあげて下さい。1、台風が近くにいる、大雨が降っていた時と思う人。2 の雨がやんで、晴れていた時だと思う人。3 の、台風は過ぎたけれど、雨が降り続いていた時だと思うひと。答えは 2 の雨がやんで、晴れていた時です。



問題 3。台風 10 号の大雨で、土地の低い所は、どこら辺まで水が来たでしょう。1、床下まで。2、二階まで。3、屋根まで。正解と思う番号で、手をあげて下さい。1、床下までだと思う人。2、二階までと思う人。3、屋根までだと思うひと。答えは 3 の屋根までです。



問題 4。洪水が起きたときに、避難した人は、何で避難したでしょう。1、ボート。2、ヘリコプター。3、サメ。正解と思う番号で、手をあげて下さい。1 のボートだと思う人。2 のヘリコプターと思う人。3 のサメだと思う人。答えは 1 のボートです。



次に私たちの地域である旭ヶ丘周辺の様子について発表します。まずは母子島周辺の被害の様子とその後の様子について発表します。私たちが住んでいる地域では、小貝川と大谷川が合流する母子島、飯田、一丁田、椿宮、小釜が冠水する被害が出ました。



母子島では、13 時 15 分には床下浸水が始まりました。水が増えて茶色い土の色の水が勢いよく

流れ、堤防も壊れて低い土地に水が流れていました。それに、野菜やブタなども流れていて、水の流
れはとても早く、川の水がどんどん増えて、家が見えなくなっていました。



このような大変な被害があったので、5つの地域には、今後水害の心配がないように、母子島地
区に遊水地を造成しました。そして、その地域に点在していた5集落108戸の人々の集団移転で、遊
水地内に新しい街をつくるという、全国で例のない改修事業を行いました。そうして、14haの広さを
もつ「旭ヶ丘」が誕生しました。



土には沈下の起きにくい礫質土を用いて、表土には植物が植えられるように砂質土が用いられま
した。母子島遊水地では、初期湛水池、洪水の時に遊水地に流入した河川の水を初期段階にためる池、
周辺散策路や、堤防への盛土による緩傾斜堤防、堤防の斜面を緩やかにすること、の整備を行いま
した。



洪水が起きても水に浸らないように、土地を高くしたり、土手を高くしてあつたりの工夫がされ
ています。5つの集落は今、田んぼや畑、母子島遊水地などになっています。昔、母子島があつた場
所に母子島遊水地があります。5つの集落を調べて分かったことは、5つの集落は、下館の中でも1
番被害を受けた集落だということが分かりました。

福田さんは、当時、下館河川事務所の所長さんで、旭ヶ丘のまちづくりや母子島遊水地の計画を作
ったそうですが、その時大変だったことや、心に残っていることを教えてください。



〔福田〕 もう30年も前のことですが、私の覚えていることをお話しします。

みなさんが勉強されたように、この母子島遊水地には5つの集落に108軒
の家がありました。この方々を、遊水地にした時にどこに移って頂くか、と
いうことがまず問題になりました。みなさんの意向を聞きますと、やはりこ
の際、1つの集落にまとまりたいというのが、大変強い意思、意向でしたの
で、私どもは、1つの集団移転にしようということを決めたんです。そ
して、どこに集団で住む場所をつくるのかということをも5集落の人に聞きま
すと、みなさんが、一番遊水地の北側の一丁田の辺に住みたいと言いました。

しかし、実は一丁田新田の土地を持っている方は、遊水地以外に住んでいる人がほとんどだったん
です。その人たちに協力してもらわなかったら集団移転が出来ない。それで交渉に行きました。とこ
ろが、協力はするけれども、やはりもともと自分たちが土地を持っている飯田だとか母子島の辺で集
団移転したらどうでしょうかということで、集団移転の場所を下流にするか上流にするかで、非常に
話し合いがこじれました。当時市長だった濱野市長には相当力を入れて調整にあたってもらって、結
果、今の旭ヶ丘の地域で108軒の集団移転が実現しました。

旭ヶ丘には特徴がふたつあります。非常に広い宅地ですが、その中に十字路じゃ1つしかなく、他
は全部三差路になっています。どうしてかということ、当時5集落の言い伝えで、四つ角の北東の方向
は鬼門で、人が住まないっていう言い伝えだったんです。普通にある宅地造成みたいに、十字路がた
くさんあるような街づくりをすると、その北東の角には誰も住まなくなる。そういうことが分かりま
して、十字路は少なくして、三差路で街をつくった、というのが一つの特徴です。

それから、もうひとつ覚えておいてほしいのは、あの旭ヶ丘に住んでいる土地、住まいですね、そ
れと道路との間には、30センチから50センチの余裕が作ってあります。塀を道路に直接つくらない

で、引いたところで塀を立てた。これは、住民のみなさんがお決めたことで、花の絶えない街にしたいと。水害で、つらい思いをした経験がある街ですから、出来るだけ明るい街にしたい。それで、みんなで土地を出し合って、その塀の前には四季折々の草花を咲かせようという土地にしてあるんです。また、田んぼのところの斜面に桜の木を植えています。つらい歴史を忘れて、明るい街にしたいという思いでそういう工夫を致しました。それを、少し覚えておいてください。



ありがとうございました。



ではここで、クイズでふり返ってみましょう。

問題 5。僕たちの発表をきいていればわかります。特に被害の大きかった5つの集落に入っている地域は、次のうちどれでしょう。1、飯田。2、野田。3、小釜。正解だと思ふ番号で手をあげて下さい。1 の飯田だと思ふ人。2 の野田と思ふ人。3 の小釜と思ふ人。正解は1 と 3 です。



問題 6。旭ヶ丘の面積は、約何ヘクタールでしょう。1、約 12 ヘクタール。2、約 14 ヘクタール。3、約 16 ヘクタール。正解と思ふ番号で、手をあげて下さい。1 の約 12 ヘクタールだと思ふひと。2 の約 14 ヘクタールだと思ふひと。3 の約 16 ヘクタールだと思ふひと。正解は2 の約 14 ヘクタールです。



ここまで、昭和 61 年の水害について調べたことを発表してきました。最後に、これからのことについて知りたいと思います。下館河川事務所の里村さん、これからの川づくりについて教えてください。



〔里村〕 これからの川づくりということで、すごく難しいですけど、川だけではだめで、川づくり、街づくり、それからみなさんのような人づくりなどを全部ひっくるめて良い街づくり、良い川づくりをしていくのが大切じゃないかなと思っています。そういう意味では、これからの川づくりってというのは、今発表してくれた嘉田生崎の4年生のみなさん、それから今、会場でクイズに答えてくれた養蚕小学校、それから竹島小学校のみなさんのような人たちを広げていくということが大事かなと思っています。

これからの川づくりということで、防災という意味で言うと、例えば母子島遊水地のような、水をためるような場所をつくるということとか、堤防をつくるとか。そういう施設で守る、ハード対策ということと、それに加えて避難とか、土のうを積んだりして溢れないようにするとか、そういうソフト対策を組み合わせで守っていくということが大事かなと思っています。

最近ゲリラ豪雨って言うてすごい雨が降ったりしますよね。そういうことがあるので、いくら堤防をつくっても、その堤防の高さを乗り越えてくるかもしれない。母子島遊水地をつくっていても、母子島遊水地が溢れるかもしれない。だから、ちゃんと母子島遊水地とか堤防とかは作るんですけども、それだけでなく避難とか土のう積みもしっかりやって行こうという、そういう世の中にして行かないといけないと思っています。1 年の間に、台風が来て大雨を降らすのは一日とか二日くらいかもしれません。そういう、365 日の中の 1 日、2 日のために一人ひとりが備える社会（水防災意識

社会)をつくっていくのが大事ななと思って取り組んでいます。

日常で言うと、例えば小貝川がそこにあるっていうことを常日頃から見て頂くっていうことが大事ななと思っています。川には、花もあります。虫もいます。鳥もいます。自分の好きなことでいいので、川に足を運んでもらって、そこに川があることを意識してもらう。それで、いざという時はそこが溢れるかもしれない、ということを考えてもらうことが大事だと思っています。

日頃は、近づきやすく楽しい川を。そしていざという時には強い川を。また、最近の雨はそれよりももっと強いかもしれないので、いざというときにはちゃんと逃げることも考える。そういう川づくり街づくりをしていく必要があると思っています。



ありがとうございました。



今回、小貝川の洪水のことを勉強して台風や洪水の怖さが分かりました。今は、水害の少ない小貝川になって良かったです。



洪水が起きたときは、川の近くへ絶対行かないようにしたいと思います。また、洪水が起きたときは、高い所へ避難したいと思います。みなさんも洪水に気をつけましょう。



起立。これで、嘉田生崎小学校4年生による小貝川の洪水と母子島についての発表を終わりにします。ありがとうございました。



〔進行〕 みなさま、大変素晴らしい発表をありがとうございました。嘉田生崎小学校みなさまは御着席ください。それでは最後に、ただ今のトークセッションで未来を担う嘉田生崎小学校4年生のみなさんの発表を聞いて、また、今後の筑西市について、猪瀬土木部長、一言お願い致します。



〔猪瀬〕 最後に、私の方から、トークセッションの感想を述べさせていただきます。

まず、嘉田生崎小学校の4年生のみなさん、本日のおとなとこどものトークセッション、とてもよくできていました。当日の天候の移り変わり、被災状況、救助の状況や当時の旭ヶ丘となった経緯など、スライドを使って非常にわかりやすく、大人顔負けの発表であったと非常に感心しております。

私は当時、27歳で、市役所に入って4年目の夏の出来事でした。みなさまが調べて頂いた通り、前日からの非常に強い雨の中、市役所職員として、市内の各地の内水対策に走り回っておりました。当日は徹夜で土のうをつくり、はん濫箇所への設置を行っていましたが、今日のみなさまの発表にもありましたような極めて細やかな資料を見ながら、当時の惨状が一気によみがえり、冷や汗をかいた思いでありました。

今回のトークセッションを行って、大切なのは、実体験、記憶の継承だと考えております。みなさんが今回、勉強し、発表をしたことを今度はみなさんが大人になった時、子どもたちに伝え、災害の怖さ、そして水防、水防災の大切さを伝えていくことが、万が一の時の行動に反映されていくものだ

と考えております。

また、平成 27 年 9 月の関東・東北豪雨を踏まえた鬼怒川緊急対策プロジェクトについては、ただ今、下館河川事務所にて、急ピッチで堤防や周辺整備を進めて頂いており、筑西市も、二人三脚で内水対策においても整備を行っているところです。筑西市においても、整備が終わったから終了ではなく、今後いつ発生するか分からない災害に対し、若い職員へも災害に際しての心構えを継承していきたいと思っております。

本日のみなさまの発表を聞いて、改めて感じられましたが、川は怖い面もありますが、実はとっても身近で親しみやすい場所でもあります。今後はみなさんが安心して、川と仲良く共存できるよう、街づくりを筑西市も、国、県とともにやってまいりたいと思っております。

〔進行〕 ありがとうございました。以上を持ちまして、第 1 部 こどもとおとなのトークセッションを終わります。嘉田生崎小学校のみなさん、ご登壇頂いたみなさん、ありがとうございました。

こどもたちの発表スライド

小貝川の洪水と母子島

～総合的な学習の時間の調べ学習から～

嘉田生崎小学校 4年一同

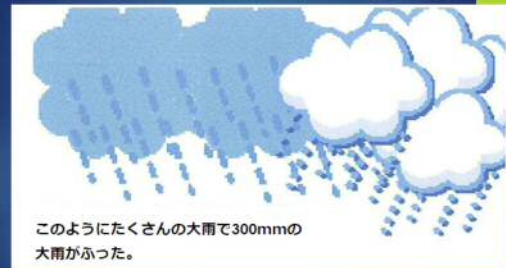
小貝川の洪水履歴



小貝川の洪水時の状況

発生年月	主な浸水地
昭和13(1938)年7月	瓦屋敷、水田等
昭和25(1950)年8月	小貝町、新田村
昭和28(1953)年8月 台風19号	小貝町、新田村
昭和27(1952)年8月 台風19号	新田村
昭和31(1956)年8月 台風19号	新田村、新田村、新田村、下妻町
平成11(1999)年7月 台風19号	新田村、新田村、新田村、新田村
平成28(2016)年8月 台風27号	新田村

台風10号の大雨や嵐について



このようにたくさん的大雨で300mmの大雨がふった。

洪水の前の様子

台風10号による降水は関東北部では8月4日の未明から始まったが、時間雨量が10ミリメートルを超えるようになるのは、19時ごろからで、時間雨量10ないし20ミリメートルが夜半まで続いた。



昭和61年8月台風がもたらした豪雨で、24時間屋300ミリメートルという記録的な集中豪雨にみまわれた小貝川のていぼうがこわれ、町に水が流れこみ洪水になりました。

洪水の後の川の様子

おおむね3から4日に水は引いていた。
小貝橋北方と南方に、4日位上浸水していた。
海老江付近より上流

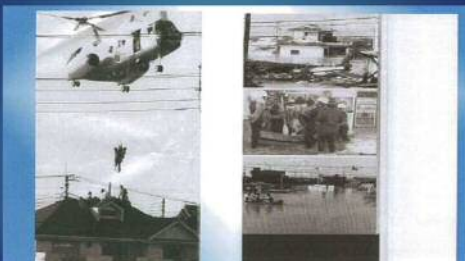


昭和61年8月に起きたこう水

水で何もなくなったから洋服もないしよくりょうもなかったからまずいからした



救助の様子



被害について小貝川



クイズ1

昭和61年8月にあった台風10号の雨の量は、だいたい何mmでしょう。

- ①30mm ②300mm ③3000mm

答え

2 の300mmです。



クイズ2

小貝川の洪水が起きたのは、どのような天気の時だったでしょう。

- ①台風が近くにいる、大雨が降っていたとき
②雨がやんで、晴れていたとき
③台風は過ぎたけれど、雨がふり続いていたとき

答え

2 の

「雨がやんで、晴れていたとき」です。

クイズ3

台風10号の大雨で、土地の低いところは、どこら辺までみずがきたでしょう。

- ①床下まで ②二階まで ③屋根まで

答え

3 の屋根までです。



クイズ4

洪水が起きたときに、避難をしたひとは、なにでひなんをしたでしょう。

- ①ボート ②ヘリコプター ③サメ

答え

1 のボートです。

5つの集落について

母子島 飯田 一丁田 椿宮 小釜



洪水の時の川の様子

川の水が増えて茶色の水がいきおいよくながれていた。野菜やブタなどもながれていた。川の水が増えて、家が見えなくなっていた。



小貝川洪水

母子島遊水地昭和61年の洪水の被害の大きかった母子島地区を遊水池に造成しました。その地区に点在していた、集落を集団移転させ、遊水池内に新しい町を作るという、全国でも、例のない改修事業を行いました。



母子島遊水地

母子島遊水地は水害の後、整備された遊水地です。208億円をかけて五集落108戸の集団移転で旭ヶ丘が生まれました。



クイズ5

とくにひがいの大きかった5つのしゅうらくにはいつているちいきは、つぎのうちどれでしょう。

- ①いいだ ②のだ ③おかま

答え

1と3です

おかま・つばきみや・いっちょうだ・はこじま・いいだの5つです。

クイズ6

旭ヶ丘の面積は約何ヘクタールでしょう。

- ①約12ヘクタール
②約14ヘクタール
③約16ヘクタール

答え

2の約14ヘクタールです。

まとめ

ぼくたちは台風や洪水の怖さがわかりました。
現在は水害の少ない小貝川になり、よかったです。



こうずいがおきたときは
かならずかわのちかくへはいかない

こう水が起
きたときは
高い所へ、
ひなんしよう



第2部

お天気キャスターとつくろう

マイ・タイムライン

～自分の逃げ方を考えよう～

酒井 千佳（お天気キャスター）



∞ 講演 ∞

気象災害からの犠牲者ゼロを目指して ～気象キャスターの目線から～

∞ 水防災講座 ∞

マイ・タイムラインをつくろう！

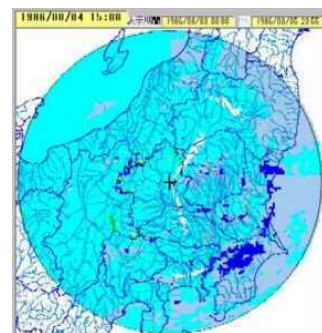
講演

気象災害からの犠牲者ゼロを目指して ～気象キャスターの目線から～



今日は、小貝川のこと、洪水のこと、いろいろ勉強してきましたけれども、ここからは気象災害からの犠牲者ゼロを目指してということで、色々お話をしていきたいと思います。

まず、昭和61年、小貝川で大きな被害が出しまった水害がありました。この時の雨雲レーダーですが、南から雨雲が来ていることが分かりますが、ちょうど日付が変わったくらいからだんだん激しくなってきました。



夕方くらいから雨が降っていたんですが、夜になって、どんどん南から活発な雨雲がかかって来て、朝になるとやんだという雨の降り方をしていました。



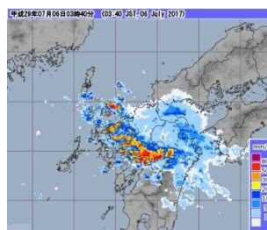
次に、これは2年半前ですね。鬼怒川の堤防決壊の様子です。この時も激しい雨が降りました。堤防が決壊して、あたり一面が水浸しという感じでした。これ、田んぼだったところが全部水になってしまったんですね。道路だけなんとか見えていますが他のところはもう、茶色い水面が見渡す限り広がっているという感じになってしまっています。この時も逃げおくれた方がたくさんいらっしゃいました。



この時の雨雲の様子を見てみます。南からライン状に次々と活発な雨雲が出てきているのが分かります。これ、線状降水帯と言います。このような雨の降り方をすると、同じような場所で激しい雨がずっと降り続いたため、水害が起きる、ということになるんです。

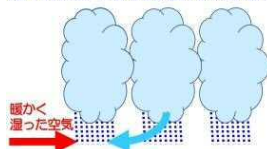


それから、去年の夏、九州の北部で大雨が降りました。この時も大きな被害が出てしまいました。土砂もたまって、家の1階部分が埋まってしまっている状態です。流されてきた木などによって、ぐちゃぐちゃな状態になってしまっているということが分かります。



この時の雨雲の様子を同じように見ていきましょう。島根県にかかっていた活発な雨雲が、だんだん南におりてくるんですね。それで、福岡県とか大分県の辺りで雨の量がかかなり多くなったということになるんですね。これも長い間降り続き、降水量もかなり多くなってしまった。そして先ほどのような被害が出てしまったということになるんです。

バックビルディング現象
「線状降水帯」により同じ場所で大雨が続く



バックビルディング現象って聞いたことありますか？先ほど線状降水帯という言葉を行いました、このバックビルディング現象によって、活発な雨雲がどんどんどんどん発生するんです。仕組みは、暖かく湿った空気が入ってくると、ここに雲がもくもくっとできます。それで、この雲は、風に流されて移動して行くんですが、この雲から冷たい空気が降りてきます。そうすると、この暖かく湿った空気がぶつかってまた雨雲ができます。この雨雲も

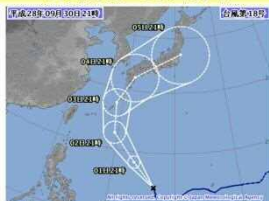
同じように風に流されて違う場所に行くんですが、ここからまた冷たい空気が降りてきて、暖かく湿った空気とぶつかることによって、また同じ場所で雲ができます。これが線状に増えていくんです。同じ場所で降り続くというよりも、同じ場所で新しい雲が発生していたということなんです。

短時間強雨が増えている



実際にこのような激しい雨というのは最近になって増えています。これは、1時間の降水量が50ミリ以上の非常に激しい雨。これを観測した地点の数を1975年から現在まで並べて見てみると、だんだん増えてきているのが分かります。これは、地球温暖化の影響の可能性があるとこのような報告もあります。この地球温暖化の影響で、強い台風が増える恐れがあります。これは理由がありまして、地球温暖化になると海水温が高くなります。台風のエネルギーのもと、暖かい海水から蒸発する水蒸気なんですね。海水温が上昇することによって、台風のエネルギーが増えていき、強い台風が増える恐れがあるということになるわけなんです。

台風情報 5日進路予報



台風情報 72時間進路予報



警報級の可能性

警報級の可能性	25日					26日				
	大雨	暴風	高波	暴風	高波	大雨	暴風	高波	暴風	高波
可能性	高	中	中	高	中	高	中	中	高	中

警報級の現象が5日先までに予想されている時

警報で危険な時間を確認

警報の種類	25日	26日	27日	28日	29日	30日	31日	1日	2日
大雨	高	中	中	高	中	高	中	高	中
暴風	中	中	中	高	中	高	中	高	中
高波	中	中	中	高	中	高	中	高	中

高解像度降水ナウキャスト



ライブカメラ情報



このように台風などで被害が出るような雨が降るという時は、前兆現象があります。順を追って見ていきたいと思います。

台風の被害がでるような3日から5日前には、どんな情報が出るか、知っていますか？みなさん、テレビ見ますか？テレビの台風情報では、5日前にはこのように進路が出ます。日本から離れていても情報は出るので、是非チェックをしてくださいね。

3日前になるともっと詳しい情報が出ます。これは、3日先までの情報なんですけど豪雨警戒域と言って、暴風域に入る可能性があるところとか、予報円といって、どこに進んでいくかというのも、だんだん詳しい情報になってきます。こういった情報が出されるのが3日前です。

この他、台風情報以外にも、色々な情報があります。この夏から新たに情報が出るようになったものに、警報級の可能性、というものがあります。大雨警報とか暴風波浪警報などの警報が出る前から実は情報が出ているんです。5日先までの情報が出ていて、例えば大雨、暴風、波浪の警報が出る確率が高いようだ、ということが表されているんですね。警報級の予報が出る時は、あらかじめこういった情報が発表されるようになりました。

そして、1日前になるとどんな情報が出るのか。ちょっと細かいですが、時間ごとに、今日、明日くらいまでの情報が細かく出るんです。時間ごと、未明から明け方、午前中、昼過ぎと、このように細かく分かれています。その時間帯の中で赤いところが警戒、警報級ですね、黄色いところが注意報級ということで、どこの時間帯に注意しないといけないのかというのが出てきます。

高解像度降水ナウキャストといって、この情報も去年の夏から新しく発表されるようになった情報もあります。どこで強い雨が降っているのかというのを市町村単位で見ることができるんですね。あとは、土砂災害とか、浸水、洪水の危険度も見るできるようになりました。

そして、これはライブカメラの情報。みなさん、見たことがありますか？下館河川事務所のホームページにはこのような情報があがっています。平常時に比べて今どうなっているのかな、っていうのが実際にライブカメラで見ることができます。例えば本当に雨が激しくなってきたら、みなさん、川を見

に行くのは危険ですよ。是非このライブカメラを利用してインターネットなどで見るようにしてほしいと思います。国土交通省からは川の防災情報ということで、全国の川の情報を見ることもできます。

そして災害が発生する時。いざ発生するような、そんな状況になっていく時は、どんな情報が出るかというと、大雨、暴風、暴風雪、高潮、波浪、大雪の、特別警報が発表されます。みなさん、特別警報って知っていますか？茨城県でも、鬼怒川の水害の時は発表されていましたが、実際にこの特別警報が発表されると、非常事態です。この、特別警報が出ている時には災害がいつ起こってもおかしくないような状況なので、この時にはもう、命を守るために今すぐ行動をとって欲しいということになります。こういった情報をぜひ、活かしてほしいと思います。地震とかと違って、水害は発生するまでにいろんな情報が出ていて、いろんな段階があります。だからこそ、日頃から備えられるし、それに合わせて対策をとれるんです。みなさん、防ぐことができます。



是非その一つとして、マイ・タイムラインというものを活用してもらいたいと思います。マイ・タイムラインというのは、避難する計画です。例えば、今すぐに水害が起こるような大雨になっています。避難して下さい、って言われて避難できますか？どこからどう行って、どこに避難したらいいか、分かりますか？まず、何をすればいいか分かりますか？というのを、みなさん、一緒に考えていこうというのがマイ・タイムラインです。このマイ・タイムラインをつくることによって、いろんなメリットがあるんです。例えば、自分の家が浸水してしまわないか、避難所までどのくらい距離があるのか、そういったリスクを知ることができます。それから、何を持って行ったらいいのか、誰と一緒に逃げるのか、危険な場所を通らないようにして、どんな道順で避難所まで行ったらいいのか。といった、逃げ方が分かります。あともう一つ。コミュニケーションの輪が広がります。ご近所の方と意見交換することによって、ご近所の方とのつながりも強く、太くなっていきます。こういったいろんなメリットがあります。この後、みなさんと一緒に作っていきたいと思います。

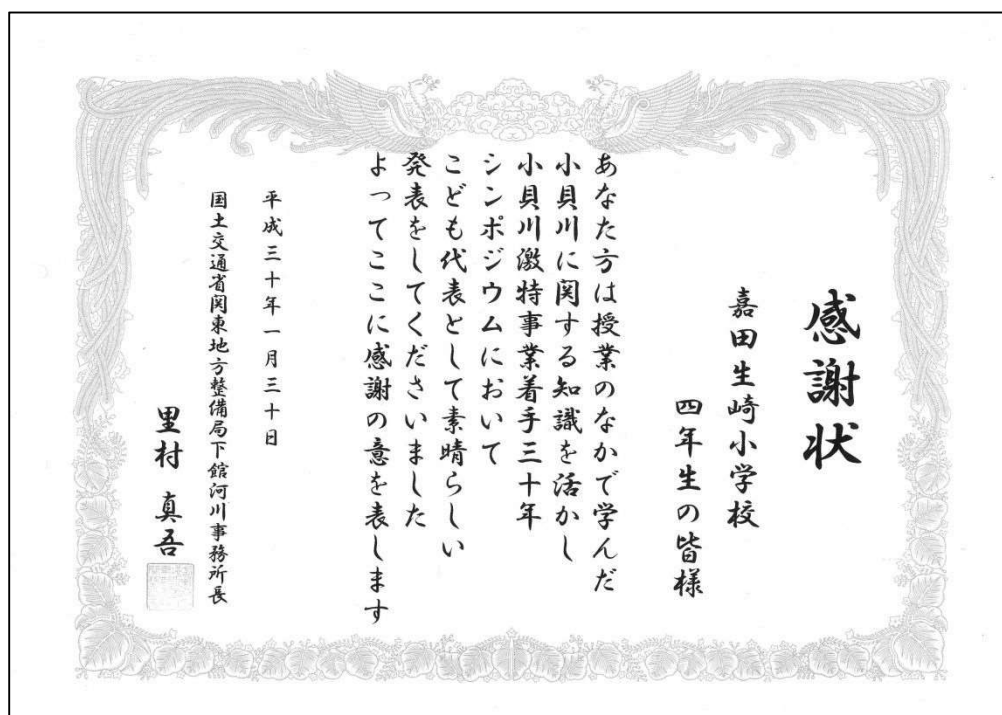
水防災講座

マイ・タイムライン検討ツール「逃げキッド」を用いて、会場の皆さんとマイ・タイムラインを作成しました。



感謝状贈呈

こどもとおとなのトークセッションにおいて、小貝川についての学習の成果を発表頂きました、嘉田生崎小学校のみなさんへ、下館河川事務所より感謝状を贈らせていただきました。



下館河川事務所長 里村真吾

みなさん、改めまして、下館河川事務所長の里村でございます。今日はお忙しい中、また、非常に寒い中、たくさんの方にお集まりいただきましてありがとうございました。そして、嘉田生崎小学校の4年生のみなさん。今、感謝状をお渡しさせて頂きましたけれども、素晴らしい発表を本当にありがとうございました。大人の我々も、改めて確認したり、気づかされたりというところがあったと思います。これをこれからも続けて行ってもらえば、素晴らしい筑西市になっていくのかな、というふうに思います。また、竹島小学校、養蚕小学校のみなさんも、ぜひ機会があれば発表をして頂ければというふうに思います。



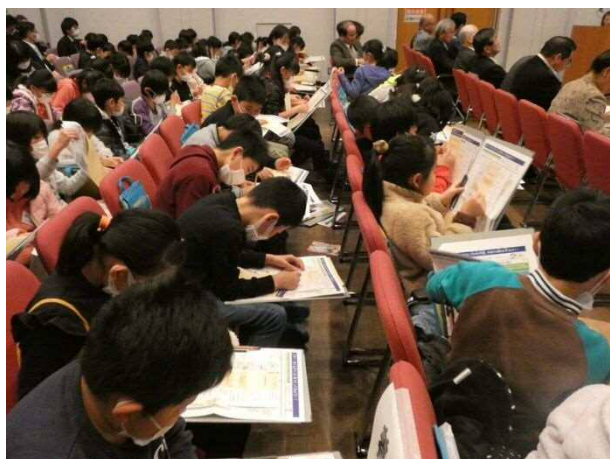
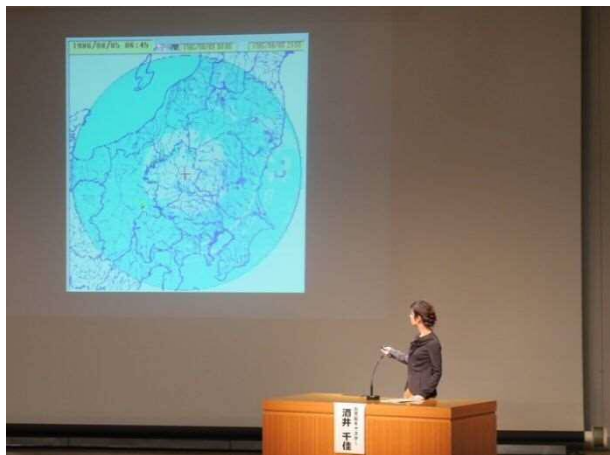
このように、将来を担うこどものみなさんと、また、これまで、水害とも闘ってきましたし、この地域をつくってきた大人のみなさんが、今日は、濱野元市長もいらっしゃっていますが、このようなみなさんと交流することが、良い地域をつくり、また、良い川をつくっていくというふうに思っています。これから我々国土交通省も、筑西市さんと一緒に、こういった場をまた作っていきたいと思いますので、引き続きのご協力、ご支援をお願い致します。

最後になりますけれども、今回は30周年シンポジウムでございました。ぜひまた、50年になった時には、多分今日の小学生たちが30歳になっていると思います。もしかしたら、気象予報士になって、酒井さんのように発表してくれる方も出てくるかもしれませんけれども、そういった日を夢見て、みなさんと一緒に良い筑西市をつくっていきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

シンポジウム写真







主なご意見（回答数80件）

問	これからどんな小貝川になって欲しいと思いますか。
---	--------------------------

- ・ごみのないきれいな水、魚鳥達が集まる川、小貝川にしたい
- ・洪水水害に強い川づくりと、河川空間の自然性、親水性の保持とのすみ分け
- ・小貝川の水害 30 年、当時は大変でした。今では水害の話も聞くこともなくなり安心して生活することが出来ている。うれしいことです。
- ・自然環境豊かで安全な小貝川
- ・親水性を活かした地域コミュニケーションを盛り上げ、川への理解を深めてほしい
- ・筑西市には小貝川・大谷川・五行川があります。これらの川に親しんでいきたいと思っています。魅力ある川づくりをお願いしたい。
- ・安全で親しめる河川になってほしい
- ・茨城県に誇れる川にして欲しい
- ・温暖化に伴う豪雨災害の無い、うるおいと安全な川へ
- ・安心安全はもちろんのこと、周囲と調和し一体化した素敵な小貝川となって欲しい
- ・二度と災害の起きない川になってもらいたいと思います。
- ・地域で有効活用できる川にして欲しい

問	シンポジウムに参加してのご意見、ご感想。
---	----------------------

- ・小学生が地域の過去を調べて、シンポジウムを開く事は将来に役立つと思います。是非来年も開催を。
- ・今回の様に後世に伝えて行くことが大事かと思います。
- ・身近な地域で起きた災害について振り返ることができて有意義だった。これからに生かせる事業だと思う。シンポジウムの発表がとても良かった。
- ・忘れかけていた小貝川水害について再認識し、以前にも増して深く理解できた。
- ・とても参考になった。良い取組だと思う。
- ・過去の出水を思い出して今に備える良い機会だったと思う。地道な取り組みをこれからも続けて下さい。
- ・小学生を参加させての取組み、大変良いと思います。これからも地域の小学生や中学生、高校生もまきこんだ防災の取組みに勤めて下さい。
- ・子供達に勉強してもらふことにより、親の意識を変える事が出来ると思います。
- ・防災意識が高まりました。
- ・マイ・タイムラインの重要性などいろいろと勉強になりました。
- ・災害が起きる前からの準備の大切さを改めて感じた。
- ・子供達を通して、家族と洪水に対して今後の河川に対しての興味を持ってもらったら良いと思った。今後もこの様な、シンポジウムを進めてもらいたい。
- ・小学生の研究は非常に良かった。

【本冊に関するお問い合わせ先】

国土交通省関東地方整備局

下館河川事務所

〒308-0841

茨城県筑西市二木成 1753

TEL : 0296-25-2171

FAX : 0296-25-3019



下館河川事務所